

新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校
学んだことを生かして、自ら判断し、
自信をもって行動できる「自主性」と、
互いの個性を尊重する「共生の心」を育む。

学びを生かせ

附属新潟小学校では、ただ学んだ、で終わりにするのではなく、それらの経験を生かして問題解決をはかる「学びを生かす子ども」の育成を目標に、自ら判断し自信をもって行動できる「自主性」、互いの個性を尊重する「共生の心」を大切にしています。

総合的な学習の時間「虹の輪タイム」は、基本的に子どもたちと学級担任で問題を見つけて解決していく場です。附属新潟小学校では平成9年から積極的に試行してきました。

問題意識 確認 実践 気付き

1学期は、障害のある方と触れ合おうということで、まず自分たちの意識はどうかを知ることから活動を始めました。

車椅子でバスケットをしている方をお招きして、一緒にバスケットをしながら、「障害をもちながらも、非常に前向きに生きているんだ」ということを学習してきました。しかし「自分たちも含めて周囲の人たちは、彼らに伝えようとしていないところがあるんじゃないか」ということ、「障害のある方と自分たちの間にこんなふう隔たりがあるのはおかしい」と考えて、いろんなつながりを持って障害のある方に自分たちから関わっていきこうと、サークル活動をしている障害のある方と一緒にサークルをしたり、隣の養護学校の子どもたちが外で遊んでいたならその輪に入ったりしました。

最後に子どもたちが作文に書いてくれました。「僕は今まで福祉の勉強はしてきたけど、どちらかというとやらされている雰囲気があった。でもいろんな人に出会うことで、僕たちから積極的に声を掛けていくと向こうから心を開いてくれるということがわかった。それで初めて自分からやる気

になった」と。地域にいらっしゃる人材を紹介するだけでも、子どもたちが考え方を覚えてくれるのだと感じましたね。

地域の問題に目を向けて

障害のある方々との学習をしているとき、放置自転車のように「自分たちが何気なくやっていたことが世の中の迷惑になっている」ということに気付きました。そこで2学期は、実際に確かめてみようという街に出ています。例えば、街中でのゴミのポイ捨て。掃除を担当でやっていらっしゃる銀行員の方にインタビューをしたところ、日に数回やらないとすごい量のゴミがたまってしまいう状態なのだとおっしゃっていました。こうしたインタビュー活動を通して、地域の問題について自分たちもできることを考えるようになっていきます。

1学期の学習を通して、障害のある方々への意識はすごく変わってきていると思います。実際に、怪我をして松葉杖で登校している児童を子どもたちが積極的にバックアップしている場面がありました。「学びを生かすにはどうすればいいか」ということを考えているようですね。

「複式学級」という特性

ここでは、複式学級という制度を取り入れています。県内で100以上の学校が複式学級を持っていますが、「複式」という形は小規模校の制度上の問題から生じているのが現状なんです。特に新潟県は山村地帯や離島もありますので、複式という制度はどうしても必要でした。しかし現在は交通の便が大変よくなったことと、効率化のために学校統合がされてきていることにより、複式校も減ってきています。

附属新潟小学校の場合は、新潟県の教育



坂井 潔 副校長



一体型の校舎になっていること、同じ敷地内に養護学校があることです。この形は全国的にも非常に少ないんですね。この特徴を最大限に生かそうと考えているところです。

3校の共通テーマである

「共生の心をもつ創造性豊かな子どもの育成」。自分の個性を最大限に生かすには自立しなければいけない。そのためにはこれからの社会、自分だけを見ていてはだめなので、共生していくことが必要となります。共生の心もち、自分の力を発揮することで社会貢献できる子どもに育ってほしい、と考えているわけです。

具体的には、まず、養護学校のお子さんを中心に障害のある方との交流を通して、障害の有無に関わらず人間関係を作っていくようにしたい。また将来的には国際理解も含めて、いろんな方々と共生できるようにしていきたいですね。

今、3校の中心に交流花壇のようなものを作ろうと計画しているんです。そこでは小学生も中学生も養護学校の生徒も、職員も保護者もみんなが関わり合えるような場にしたい。肥料をやったり水をまいたり、そういう仕事を通して日常的に交流ができればいいな、と考えています。

行事レベルでの交流も視野に入れていきます。今年は運動会を小学校と養護学校で同日開催にして、応援合戦で交流をはかりました。

ただ、なんでもかんでも一緒にやればいいじゃないか、というのは少し乱暴です。活動のねらいと中身を考えなければいけません。小・中・養護をどうやって組み合わせていくか、この調整が難しくもあり、またやりがいでもありますね。

(聞き手：石坂妙子、村越啓子)

のあり方について考えるために、昭和46年から敢えて複式学級を設置しています。といっても複式学級として児童を募集するわけではありません。在学期間に2年間だけ複式学級に在籍する場合がありますよ、ということで入学してもらっています。

児童が児童を育てる

複式学級では、やはり算数の授業は難しいですね。学年ごとに別々に学習を進めています。逆に長所は、縦の人間関係が築けることでしょうか。例えば5、6年生では、いろんな意味で6年生が5年生を育てようとしています。5年生と6年生が必ず隣になるように席を決めるので、いつも接する中で「こういうときは発言するんだよ」というように、発言の仕方まで6年生が教えたり。5年生の発言がどうしても少ないから、6年生は何とかしようと考えて行動に出ます。5年生はそういう6年生の姿を見て、ときには反発しながらも様々なことを教わっていきます。そして、5年生は、次の年6年生として5年生を育てていきます。これは、普通のクラスにはない良さだと思いますよ。今はそういった縦の人間関係で物を教わるとか、下級生を育てるといった経験がなかなかできないですからね。

共生の心を育もう

私どもの学校の特徴は小学校、中学校と



車椅子でバスケットをしている方をお招きして、子どもたちも車椅子バスケットに挑戦。



掃除を担当でやっていらっしゃる銀行員の方に、街頭インタビュー。



オープンスペースを使った学年合同学習。